

英語と日本語の物語文中の 歴史的現在についての認知言語学的考察

An Analysis of the Historical Present in Written Narratives in English and Japanese
through the Cognitive Linguistics

FUJIWARA Masamichi

藤 原 正 道

英語コミュニケーション学科教授

抄録：

本論は認知言語学の見地から、英語と日本語の書き言葉の物語文中の歴史的現在と物語の時間の進行について分析している。話し言葉と書き言葉の物語の歴史的現在用法になぜ違いが生じるのか、さらには英語と日本語の歴史的現在用法ではどのような違いがあるのかについて、認知言語学的視点から分析し、明確にしている。

Abstract：

In this study, applying cognitive linguistics, we elucidate the temporal structure of the historical present in written narratives in English and Japanese. Furthermore, we elaborate on the differences between the characteristics of the historical present in oral and written narratives in English and Japanese.

キーワード：歴史的現在形、話し言葉と書き言葉の物語文中の認知把握、英語と日本語の時間把握

Keywords：Historical Present, Speaker's Cognitive Construal in Oral and Written Narratives, Temporal Construal in English and Japanese

1. はじめに

本論の目的は、書き言葉の物語文中の英語と日本語の歴史的現在用法について、認知言語学的アプローチを用いて分析し、その特徴を明らかにすることである。具体的には、話し言葉と書き言葉の物語文中の発話者（作者、語り手）と聞き手（読者）との間の空間と時間に対する認知的

把握の違いと、それに伴うそれぞれの歴史的現在用法の違いを明確にしていく。

2. 英語と日本語の現在形

2.1 英語の現在形

英語の現在形には、以下のような用法がある。

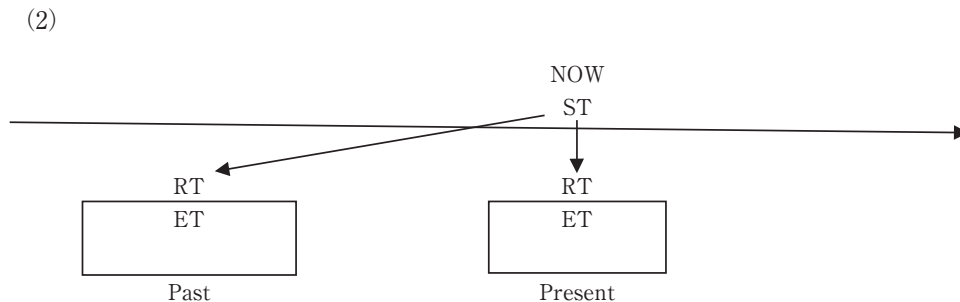
- (1) a Mary is sick. 状態
- b John walks to school. 習慣
- c Beavers build dams. 総称
- d Adams intercepts, plays it up-field. 瞬間
- e The train leaves at eight o'clock tomorrow. 未来
- f At that moment in comes a message from the Head Office, telling me the boss wants to see me in a hurry. 歴史的現在

(和田 (2015 : 292))

英語の現在時制の特徴は、(1a-e) のように発話時、つまり現在時と関連した事態を表している。しかし、(1f) の歴史的現在 (Historical Present ; 以下 HP) は、過去の事態を表している。

Reichenbach (1947) に倣って言い換えると、現在時制は発話時 (Speech Time ; 以下 ST) と参照時 (Reference Time ; 以下 RT)、さらには出来事時 (Event Time ; 以下 ET) が同時である。

一方、過去時制は RT が ST から離れ、過去の ET と同時になる。発話者は RT を経由して ET を把握する。これらのことは、次の (2) のように図示できる。



HP は、過去に生じた事態を現在形で表現する。つまり、RT は ST から離れ、物語中の過去の時間である ET と同時を示しており、話し手や作者の発話時と同時ではない。この点で他の現在形の用法と大きく異なっている。

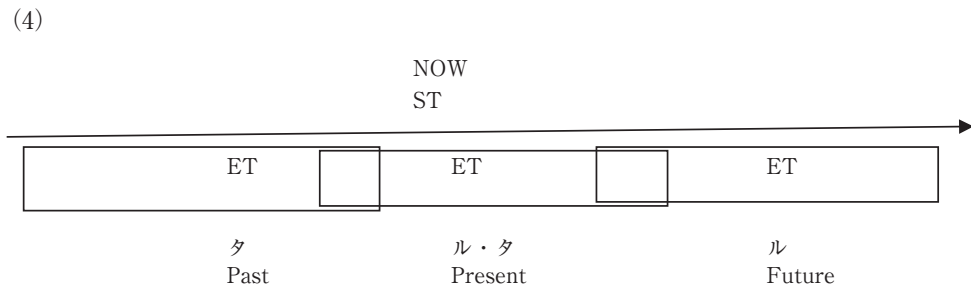
2.2 日本語の現在形

日本語は、英語のようにSTがRTを介してETを特定する絶対時制を持たず、ETとSTの位置関係から時間を表す相対的時制の特徴を持つ（中野（2017）や和田（2015）を参照）。

英語では、文法的アスペクトも *have- en* や *be- ing* として明示され、過去と現在完了、そして現在形が表す事態の時間の範囲が明確なのに対して、日本語の「タ」形と「ル」形が表す事態の明確な時間の範囲の区別は、曖昧である。

- (3) a 明日5時に起きる。
 b 来月、引っ越しする。
 c 安いよ。さあ、買った、買った。
 d 明日、英語のテストだった。

(3) の例のようにル形が現在のみ、タ形が過去のみを示すのではなく、英語のような明確な時間の範囲はない。次の (4) のように図示できる。

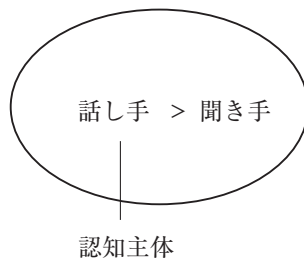


3. 英語と日本語の書き言葉の物語文中の認知構造

3.1 英語の認知構造

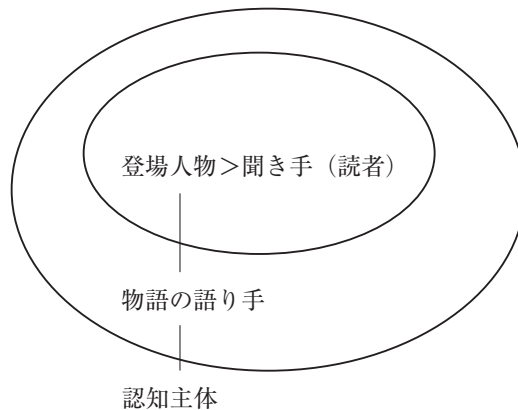
英語の話し手の認知構造は、話し手自身をその場を離れた位置から捉えるところにある (Langacker (2008))。 *Where am I?* (ここはどこ?) のように話し手である主語 I は、第三者が見ているかのように明示される。これらの関係は簡略化すると、次のように図示できる¹。

(5)



書き言葉の物語の場合、(5)に加えて物語の語り手や物語世界という認知範囲も追加されるため、次のような関係になると仮定できる。

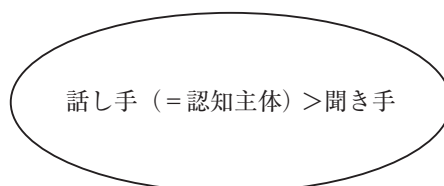
(6)



3.2 日本語の認知構造

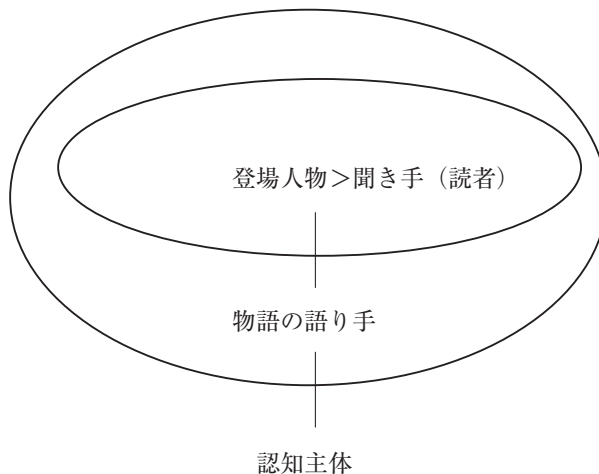
日本語の認知構造は、(7)のように認知主体である発話者と聞き手が、イマ・ココという場所と時間を共有する(池上(2003/2004)、中野(2017)、中村(2019)参照)。

(7)



しかしながら、日本語の書き言葉の場合、物語の語り手は聞き手（読者）と同じ「場」ではなく、その外側から眺める位置へと移動し、認知主体である話者は、さらにその外側の位置を占めることになる。したがって、次の（8）のように英語の書き言葉の物語による認知把握と同じ構造になる。

（8）



書き言葉の物語になると、話し言葉では省略可能であった「私」という主語が明記されるようになるのもこのような日本語の認知構造の変化によるものと考えられる²。

例えば、次の（9）は、主人公桃太郎の視点から書かれた童話『桃太郎が語る桃太郎』からの例である。（例文中の下線部は本論筆者による。以下同様。）

（9） すうーっといきをすいこむと、あまくてやさしい、いいにおい。ぼくは生まれる前、大きな桃の中にいました。すぐ外からは水の音。

（クゲユウジ（2017：2））

話し言葉では、（7）のように話し手と聞き手が同一の認知空間を占めるので、発話者を示す主語が明示されない場合が多い。一方、書き言葉の物語の場合、（8）のように発話者は物語の語り手や登場人物を通して、間接的に聞き手・読者と向き合うことになる。

したがって、（9）の例のように読者に対して話し手が語りかけるように構成されている一人称の書き言葉の物語では、登場人物の桃太郎が「ぼく」として明示されることになる。

物語の語り手が登場人物の桃太郎自身である「ぼく」であったとしても、（7）と違って、（8）のような認知構造になるので、主語を明示する必要がある。

4. 英語と日本語の歴史的現在

英語の認知把握の場合、(5) のように認知主体は、話し手を聞き手とは違う外側の認知範囲から捉えている。このことは (2) の時間把握にも反映され、英語は RT を経由して ET を捉えることがその一例だと考えられる。

日本語では、(7) のように話し手と聞き手が同一の認知空間を有しており、このことも (4) の時間把握に反映されている。日本語の時間把握が ST から直接 ET を捉えることがその特徴である。

上記のような英語と日本語の時間把握の認知構造が、それぞれの言語の HP に反映され、特徴を形成していることを具体的に例を用いて、分析していく。

4.1 英語の歴史的現在

Wolfson (1982) が述べているように、話し言葉の物語では、まず事態を過去形で述べ、HP を挟み、また過去形へ戻るパターンが一般的である。しかしながら、書き言葉の場合は異なる。次の例を見てみよう。

- (10) It is the summer of 1848. We are in New England. Phineas P. Gage, twenty-five years old, construction foreman, is about to go from riches to rags. A century and a half later his downfall will still be quite meaningful.

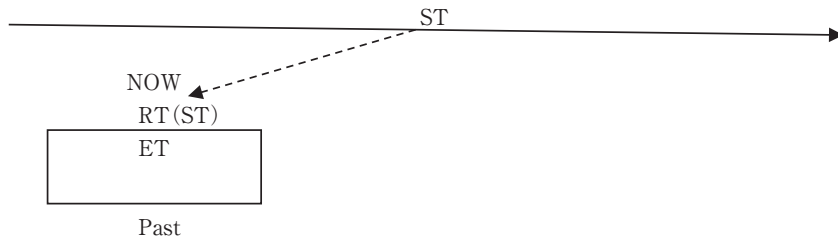
Gage works for the Rutland & Burlington Railroad and is in charge of a large group of men, a “gang” as it is called, whose job it is to lay down the new tracks for the railroad's expansion across Vermont. Over the past two weeks the men have worked their way slowly toward the town of Cavendish ; they are now at a bank of the Black River. The assignment is anything but easy because of the outcrops of hard rock. Rather than twist and turn the tracks around every escarpment, the straighter and more level path. Gage oversees these tasks and is equal to them in every way. He is five-foot-six and athletic, and his movements are swift and precise. He looks like a young Jimmy Cagney, a Yankee Doodle dandy dancing his tap shoes over ties and tracks, moving with vigor and grace.

(Damasio (1994 : 3))

(10) は Damasio (1994) の冒頭部分である。1848 年という物語全体の参照時間が明示されているが、過去形ではなく、現在形で始まっている。さらに今後生じる事態には、*is about to* や *will* が用いられている。また、以前の事態には、現在完了形 *have worked* が使われている。これらのことから、RT は過去であり、その時点が物語の現在時であり、(10) の例は HP 用法であることは明らかである。

物語中の RT は過去なので、作者は現在形を用いて、読者とともに ST を RT へ移動させ、事態が生じるのを同時に眺めることになる。このことは、次の (11) のように図示できる。破線は擬似的に ST が移動していることを表す。

(11)



認知主体も同時に移動するとすると、書き言葉の認知構造の (6) から話し言葉の認知構造である (5) へと近づくことになる。

ところで、話し言葉のように過去形 > HP > 過去形と配列すると、HP は統語上も目立つので、物語の重要部分、つまり前景であるかのように見えるかもしれない。しかしながら、藤原 (2021) でも示したように物語中の時間は、常に進んでいると認識され、事態の時間的境界が明示されない場合のみ時間の進行が止まる (または前文と同時となる)³。時間的境界が不明な事態は、物語上の重要な部分ではなく、物語の後景 (背景) となる。

時間的有界性・非有界性には、時制や動詞の語彙アスペクトや時間を表す副詞などが、大きく関係している。物語に一般的に用いられる過去時制は、和田 (2021) 等でも述べられているように、事態が生じる時間に境界がある。非有界性を含意する状態動詞でも過去時制により、時間的有界性が見られる。

現在形時制は (1d) のように現在の瞬間に生じる事態を表すこともできるが、その他 (1b, c, e) のように現在時でなく、過去や未来へ拡張する時間を意味することもあり、その場合、時間的には非有界性を含意することになる。したがって、HP の場合、時間の進行、つまり時間の有界性は、時制以外の動詞の語彙アスペクト等が大きく影響することになる。

上記の (10) の時間の進行を分析すると、最初と二番目の文中の *be* 動詞は時間としては有界性を含意しないので、時間は進まない。続く *is about to* や *will* という法助動詞は、その時点つまり 1848 年当時の語り手の心情を表し、時間の非有界性から物語の時間は進行せず、物語の背景となる。

次の段落の *work* やその他の動詞が表す事態も非有界的で、物語の時間を進めるような重要な部分ではなく、背景的情報をかたっている。つまり、HP で物語の前景、重要部分を語ってはいない。

一時的に (6) から (5) のような認知構造に移行することによって、つまり ST が RT と同時になることによって、対象の事態を読者の眼前で生じているかのような印象を与えていることは

間違いないだろう。

4.2 日本語の歴史的現在

日本語では書き言葉の物語文は、一般的にタ形で記される。聞き手が目の前に存在しない物語では、発話者の確信の元に対象の事態が語られるので、時間的には既に生じたこととして語られる。HP について、英語版と日本語版の物語を比較してみる。

- (12) If I rolled my chair back into the window bay behind my desk, I could look up past the office buildings and see the sky. It wasn't exactly overcast. It was kind of grayish, with the sun pushing weakly through the thin clouds. Below on Berkeley Street the young women from the insurance companies were starting to show fall fashions. I took some time to evaluate them, and concluded that fashionable dress was heavily dependent on who was wearing it. I looked at the calendar. September 13. Technically it was still baseball season, but the Sox had dropped out of contention at the beginning of August, leaving me with nothing else to thinking about but sex ... which was, I thought, considerably better than the other way around.

(Parker (2009 : 1))

- (12') 椅子を机からうしろの出窓に寄せると、建ち並ぶビルの向こうから空が見えた。曇天というほどではない。灰色がかった薄雲を通して、陽の光が弱々しく射している。下のパークリー通りでは、保険会社から出てくる若い女性たちの服装が秋めいてきた。しばらくそれを観察し、しゃれた服は着る人間に大きく左右されるという結論に達した。カレンダーを見た。九月十三日。まだ野球シーズンではあるが、レッドソックスが八月初めに脱落したとあっては、セックスの他に考えることがない…まあ、その逆より遙かにましだが。

(Parker (2009) 加賀山 (訳) : 1)

日本語では上記の (7) のように、語り手 (話し手) と読者 (聞き手) が同じ認知空間を共有することが特徴であるため、対象の事態に対する話し手の認知把握の間接性が少ない。加えて、時間把握は英語のように RT を経由して事態の ET を特定しないので、物語の時間の特定に関して英語より自由度が高い。言い換えれば、時間的視点の位置の自由度が高いと言える。この特徴によって、(12) の英語版に比べて、(12') は自由にタ形からル形へ、ル形からタ形へ変化していることも当然である。

また、(12') 中の HP は時間的な有界性を含意せず、物語の時間を進行するような部分を構成していない。ここでも HP は、物語の重要な部分を語るのに用いられていないことになる。

- (13) The room was large and not loud. The tables were well spaced. There were windows

where you could look out at Copley Square. The service was good. I was paying with a small part of Heidi Bradshaw's swell advance ... And I was with the girl of my dreams.

(Parker (2009 : 5-6))

- (13') レストランは広々として、騒がしくなかった。テーブルの間隔が充分とられている。窓からはコプリ－・スクウェアが見渡せる。サービスも行き届いている。支払いはハイディ・ブラッドショーの多額の前金のほんの一部ですみ…しかも夢の女性といっしょにいる。

(Parker (2009) 加賀山 (訳) : 12)

(13) や (13') も同様で、英語版では過去形が使われている部分に、日本語版では「とられている」や「見渡せる」などル形が用いられている。かなりル形使用の自由度は高い。

さらに (13') 中の下線部の HP の語彙アスペクトは時間的非有界性を含み、物語の時間は進行しない。つまり、この部分は物語の背景であり、物語の重要部分を成す前景ではない。

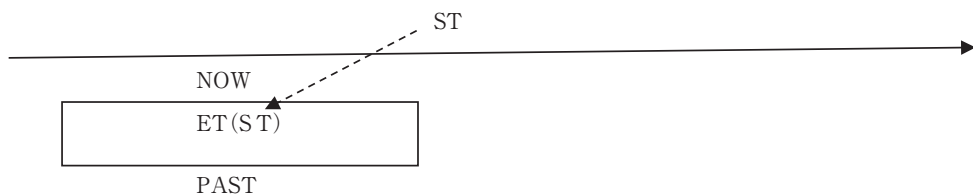
さらに次の (14) を分析する。

- (14) 聞こえてくる言葉が抽象的で、意味やイメージをつかむのが難しい。混濁した世界、乳児、元の世界、音楽、脈絡がなく、意味を考えイメージをつかもうとすると、それが本当に母の声なのかどうか、曖昧になってきた。声の質や抑揚、言葉の選び方など特定できないし、特定しようとする力が失われていく。ただし、その脱力は、奇妙なことに気持ちよかつた。誰の声だろうが関係ないという風に投げやりになったわけではない。声や顔や記憶を特定することから解放されていくような気がしたのだ。

(村上 (2020 : 1374-1375))

(14) でもル形とタ形の交換は頻繁である。しかし、事態は過去に生じており、ET も過去である。そうすると、ル形を用いることによって、ST が過去の ET へと移動し、読者もともに ET へと移動することになり、事態が眼前で生じているかのような効果が、生じている。このように HP を用いて、ST が ET と同時へと移動する構造は次の (15) のように図示できる。

(15)



日本語の話し言葉の場合、(7)のように話し手と聞き手がイマ・ココを共有するので、発話者と認知主体が同一化する。

一方、書き言葉の物語でも HP を用いれば、過去の事態を表す ET へ ST が移動したかのように、作者と登場人物と読者は同じ時間を共有し、物語上でイマ・ココが実現する。つまり、書き言葉の (8) から、話し言葉の (7) の様な認知構造へと移行する。

日本語でも書き言葉の物語では、英語と同じ発話者が登場人物を外側から捉えた認知構造となるが、日本語の会話の場合、(7) のようにももとは認知主体と発話者と聞き手が同一認知空間を占める特徴を持つので、書き言葉となっても、物語の発話者である語り手と登場人物が入れ替わり易いのではないだろうか。

かつ日本語の時間把握場合、英語と異なり、RT を経由して ET を把握する必要もないので、物語の語り手の現在である ST が、英語より自由に ET へ読者とともに移動することが可能となる。

5. まとめ

話し言葉と書き言葉での発話者と聞き手の空間と時間に対する認知把握は異なり、さらに英語と日本語でもそれぞれ異なる。英語では認知主体が発話者から離れ、さらに時間把握も ST から RT を経由して ET を把握するという絶対時制を特徴に持つので、発話者と認知主体が自由に移動することができない。

一方、日本語の発話者は認知主体と一致し、聞き手も同じ時空間を共有し、さらに ST が直接 ET の位置を決める相対的時制なので、発話者と認知主体は、物語の時間内を自由に移動することが可能である。したがって、書き言葉の物語内で頻繁に ST が ET へと動き、現在形、つまり HP を形成することが可能である。

英語と日本語の話し手と聞き手の「場」に対する認知が、時間に対する認知にも影響を与え、HP の出現の頻度の結果となっていると言える。

物語の語り手が登場人物と一致する一人称小説と、一般的な三人称の語り手での HP の使用され方などは今後の課題としたい。

〔注〕

- 1 楕円は認知範囲を表している。
- 2 話し言葉では (i) のように「私は」を明示すると不自然であるが、書き言葉では問題なく使える。このことも、話し言葉では話し手が認知主体であるので、既知の「私」が必要でなくなる。一方、書き言葉では、認知主体と登場人物（発話者）が異なるので、主語が明示される。
(i) 私はうれしかった。
- 3 時間的境界とは、事態の開始や終了またはその両方が示されていることを意味する。開始点、終了点の両方が曖昧な場合、時間的に非有界となる。

〔引用文献〕

- Damasio, Antonio R. (1994) *Descartes' Error: Emotion, Reason, and the Human Brain*, Penguin Books.
 クゲユウジ (2017) 『桃太郎が語る桃太郎』 高陵社書店.
 Parker, Rober B. (2009) *Rough Weather*, Berkley Books. (加賀山卓朗 (訳) 『灰色の嵐』 早川書房)
 村上龍 (2020) 『Missing 失われているもの』 村上龍電子本製作所.

〔参考文献〕

- 藤原正道 (1999) 「時間の進行と日本語と英語の歴史的現在について」『実践女子大学文学部紀要』 第 41 集, 61-72.
 藤原正道 (2021) 「英語と日本語の物語文の時間の進行についての認知言語学的一考察」『実践女子大学短期大学部紀要』 第 42 号, 49-61.
 池上嘉彦 (2003) 「言語における <主観性> と <主観性> の言語的指標 (1)」『認知言語学論考 No.3』 山梨正明他 (編), ひつじ書房.
 池上嘉彦 (2004) 「言語における <主観性> と <主観性> の言語的指標 (2)」『認知言語学論考 No.4』 山梨正明他 (編), ひつじ書房.
 庵功雄・田川拓海編 (2021) 『日本語のテンス・アスペクト研究を問い直す 2 「した」「している」の世界』 ひつじ書房.
 小玉安恵 (2011) 「体験談における歴史的現在形の機能と視点」『日本語教育』 148, 114-128.
 Langacker, Ronald W. (2008) *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*, Oxford University Press.
 中村芳久 (2019) 『認知文法研究: 主観性の言語学』 くろしお出版.
 中野研一郎 (2017) 『認知言語類型論原理 「主体化」と「客体化」の認知メカニズム』 京都大学学術出版会.
 奥川育子 (2021) 「日・英語物語談話における時制形選択」庵功雄・田川拓海編 (2021) 『日本語のテンス・アスペクト研究を問い直す 2 「した」「している」の世界』 159-183, ひつじ書房.
 Reichenbach, Hans (1947) *Elements of Symbolic Logic*. Free Press.
 和田尚明 (2015) 「英語の単純現在の分析再び」深田智他 (編) 『言語研究の視座』 292-308, 開拓社.
 和田尚明 (2021) 「英語の「した」」庵功雄・田川拓海編 (2021) 『日本語のテンス・アスペクト研究を問い直す 2 「した」「している」の世界』 137-157, ひつじ書房.
 Wolfson, Nessa (1982) *CHP: The Conversational Historical Present*, Foris.